

REPORT

独立行政法人 国際協力機構（ジャイカ）

四国センター JICA徳島デスク

森陽子

マラウイでJICA海外協力隊として野菜栽培の指導を行った河崎さんは、帰国後、徳島県で農業を始めました。「食べる」ということは私たちが生きるうえで必要不可欠なものです。しかし、お店に行けばどんなものでも手に入れることができる日本では、「食」の大切さに気付く機会が少ないです。

「食」について考えることはSDGsの目標である、「2.飢餓をゼロに」や「12.つくる責任つかう責任」につながります。

この記事を読んで、少しでも自分の口に入れる食べものについて考え、興味を持つきっかけになればと思います。

自然農園マユコベ 河崎雅人 (徳島県 徳島市)

目の前にあるモノについてどれほど理解しているのでしょうか。作り手はもちろん、その素材がどこからきているのか、その素材をつくるためのエネルギーはどれほどなのか。普段私たちは考えられないほど多くのことから目を背けています。私が赴任していたアフリカ南東部のマラウイ共和国では、多くの人々が農産物を生産しています。活動していた地域は農村部、活動の内容も農業関係でしたので毎日食べるものの大切さを感じずにはられない環境でした。その中で私が特におもしろいと感じたことは生産者と消費者の境があいまいなことでした。誰もが自らの手で生み出す生産者であり、消費者でもあります。

日本では自分が何を消費しているのか、何を食べているのかさえ理解していない人が多く、それが原因で、数々の問題が引き起こされています。例えば生産現場では、劣悪な環境で生活、労働する人々や家畜が想像しやすいかもしれません。



農産物の場合は、農地の荒廃やそれに起因する豊かな生態系の破壊です。日本の農地も、化学肥料や農薬がないと農産物を生産できないほど荒廃した土地がたくさんありますが、たとえそれらが想像しにくくても、種々の環境の変化から起こるわたしたちへの影響を考えることは必要です。そしてそういった問題は日本に限ったことではなく、どの国でも経済的な発展が起こると（起こるためには）、同じ

原因を作り出していきます。マラウイでさえも都市では、同じ状態になりつつありました。



自然農園マユコベ 河崎雅人
(徳島県 徳島市)

わたしたちは日々、社会が抱えるその問題のほんのひとつでも、より良い解決に向かえるようにと願い、活動しています。農産物を生産販売することと同割合で、食べものを地域の人と一緒に生産し分け合う活動や子どもたちと土のことから食べものが体に入ることまで体感する活動などをおこなっています。意識していることは、イベントや体験で満足せず、日常に入り込むことです。大切な教育は自然から得られることが多いのです。

自然と関わり生きてると、改めて人間も自然の一部だと感じられます。虫も植物もほんの小さな微生物でさえも役割があるのではないかと考えることができます。それが人間の目にはただ他の生き物に食べられる役割にしか見えな

いとしても、実際にはもっと大きなことを成し遂げているのかもしれない。人間も一人ひとり生きている意味があり、価値があり、役割もあるように思います。子どもの頃から「自分は必要とされている」と自然との関わりの中で感じられていたら、それはとても幸せなことかもしれません。もちろん大人でも同じです。

そういった活動を進めていると、やるべきことややりたいことがどんどん増えていきます。その中で大切にしていることは、できるだけライト（light）にすることです。ただ単純化するだけでなく、皆がゆったりとつながって生かすことができる関係性を築ければと考えています。



元々は軽い気持ちで決めた農業分野への道でした。マラウイでは多くの人が作物を育て、大切にしていることを目の当たりにし、それに素直に驚き、感動しました。その感動の余韻の中で、日本で農業をしようと決意しました。そしていま、農を通して日々のせかいを見ていられるのは青年海外協力隊でマラウイに赴任したことが大きな入口だったと感じています。

マラウイでの活動は草の根的なとても小さなものだったかもしれませんが。しかし今のわたしたちのような、ほんの小さなインパクトが無数に増え、それがやがて大きなうねりとなることをマラウイの活動時代に学んだことのひとつとして、いつも胸に留めています。

